

パリにおけるロッシーニ作品の受容(1816-1830)とオペラ・コミック《セビーリヤの理髪師》映画版

水谷 彰良

内容予告：

ロッシーニのオペラを同時代に最も高く評価したのはフランス人でした。パリではさまざまな形でロッシーニ作品が上演されましたが、その受容は次の3種に分けることが出来ます。

- (1)イタリア劇場におけるオリジナル・イタリア語版
- (2)オペラ座におけるオリジナル・フランス語版
- (3)オペラ・コミック座その他の劇場のフランス語翻案

講演の第1部では、3種の上演形態の違いと特色をそれぞれの楽譜や資料によって明らかにし、第2部でオペラ・コミック《セビーリヤの理髪師》映画版を鑑賞します(ジャン・ルビニャック監督、1947年制作、48年封切り。全2幕96分)。オペラ・コミック版は単にフランス語台本への置き換えではなく、楽曲にも違いがあり、またフランス人ならではの歌唱の違いも楽しめます。 [講師・記]

ロッシーニ最初のパリ訪問と歓迎宴

ロッシーニが初めてパリに足を踏み入れたのは1823年11月9日、ロンドンに向かう旅の途上だった。ロッシーニを歓迎する宴会を企画したのがカスティル＝ブラーズ、新聞屋フェリックス・ボダン(Félix Bodin, 1795-1837)、音楽出版社の経営者アントーニオ・パチーニ(Antonio Pacini, 1778-1866)だった。11月11日付『ラ・パンドール(La Pandore)』紙が、11月16日、日曜日に、ロッシーニ氏に捧げる晩餐会が催されると告知した。会場は、シャトレ広場に面したレストラン「ヴォーキテット(Veau-qui-tette)」の大広間である。ヴォーキテットはパリで最も古いレストランの一つで、その起源は16世紀に遡り、羊の脚肉が名物料理だった。

16日に行われた歓迎晩餐会の模様は、18日付『ラ・パンドール』紙によって詳細に報じられた。それによれば、ロッシーニが登場するとガンパロ率いる素晴らしいアンサンブル(concert d'harmonie)が《泥棒かささぎ》の序曲を演奏して迎えた。150人の出席者の見守る中、ロッシーニはテーブルに誘われ、マルス嬢とパスタ嬢の間に着席した。向かいにはルシュールが右にロッシーニ夫人、左にジョルジュ嬢を伴って座った。周囲には、グラッサーリ夫人、サンティ夫人、デメリ夫人、タルマ、ボワエルデュー、ガルシーア、マルタン姿があった。芸術界の名士が一同に介し、オベール、エロルド、シセリ、パンスロン、カジミール・ボンジュール、ミモー、画家のオラース・ヴェルネがいた。

食事の間じゅう、ガンパロのオーケストラがロッシーニのオペラの楽曲を演奏していた。

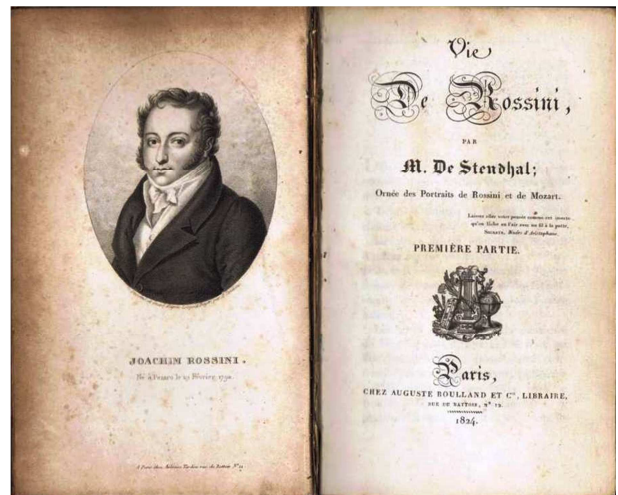
第二のサーヴィスでは、バジョーリ氏がロッシーニを讃える詩を読み上げ、続いてそのフランス語訳をタルマが読んだ(註：この頌詩は『ロッシーニの誕生(La naissance de Rossini)』の題名で18日に印刷)。2人の歌手(パティスト氏とマルタン氏)が、それぞれクプレを歌い、出席者に称賛された。

デザートになると、ルシュールが立ち上がり、次の祝辞を述べた——「ロッシーニへ！ そのきらめく才能が新たな道を切り開き、音楽芸術に新たな時代を示した」。ロッシーニが答礼に「フランスの流派と音楽院の繁栄を！」と述べると、それに答えてルシュールが「グルックへ！ ドイツの技法の源泉の豊かさ、彼がフランスのトラジェディ・リリックの精神を理解し、そのモデルをなした」、ガルシーアが「グレットリへ！ 最も才気に富み、フランスの音楽家たちの間で最も歌われた作曲家の一人に」と述べると、ロッシーニは「モーツァルトに！」と応じ、続いてボワエルデューがメユール、エロルドがパイジェッコ、パンスロンがチマローザの名を挙げて祝杯を挙げた。その後、オーケストラがロッシーニの音楽を演奏し続けて出席者を賛嘆させ、タルマが劇の台詞を朗読してロッシーニを楽しませた。

スタンダールが翌年予定した『ロッシーニ伝』をこの宴会に間に合うよう緊急出版したことで判るように、ロッシーニは31歳の若さで時代の寵児になっていたのである。

約1か月のパリ滞在に続いてロンドンを訪問したロッシーニに接触をはかったのがフランス大使ド・ポリニャックで、1824年2月27日、4万フランの報酬で1年間のパリ滞在とオペラ座(王立音楽アカデミー)のためのオペラを作曲する契約が結ばれた。この話は同年9月16日のルイ18世の死により撤回されたが、11月25日には年2万フランの報酬で王立イタリア劇場の音楽舞台監督を務め、新作から別途報酬を受ける契約がフランス王家との間に結ばれた。

かくしてロッシーニはパリに定住し、シャルル10世の戴冠を祝う《ランスへの旅》を作曲したが、1826年10月に「王の作曲家にして声楽総視学官」に任命されるとオペラ座用のフランス語オペラを求められ、年1作のペースで《コリントの包圍》《モイーズとファラオン》《オリ伯爵》《ギョーム・テル》を提供することになる。



スタンダール『ロッシーニ伝』第1部のタイトル頁とロッシーニの肖像

フランスにおける最初のロッシーニ作品の演奏と上演

ロッシーニの楽曲がパリのイタリア劇場 (Théâtre Italien [イタリア王立劇場 Théâtre Royal Italien/サル・ルーヴォア Salle Louvois]) で初めて正式に歌われたのは、1816年6月20日の演奏会においてであった。イタリアからパリを訪れた若い女性歌手ブリッツィ嬢 (Mlle. Brizzi) により、1曲のアリアが歌われた (曲目不明)。

オペラ初上演は8か月後の1817年2月1日、イタリア劇場における《アルジェのイタリア女》である (ロッシーニが18歳でオペラ作曲家となって6年半後。《アルジェのイタリア女》世界初演は1813年5月22日ヴェネツィア)。

◎ロッシーニ時代のイタリア劇場 (イタリア座)

イタリア劇場とはパリで活動するイタリア人によるイタリア・オペラの上演母体の総称で、1801年から1878年まで存在した。イタリア劇場の活動は五期に区分でき、その第三期に当たるカタラーニ夫妻のイタリア王立劇場 (1815~18年) が経営に失敗して破産した反省から、フランス政府はイタリア劇場の直轄運営に乗り出し、1819年3月20日に第四期イタリア劇場が始まった (パエールの旧作《フィレンツェの亡命者たち》で開場)。

会場は1825年11月8日までルーヴォア劇場、同月12日から1838年1月14日までサル・ファヴァールが使用された。初年度の13作品にはロッシーニの《幸せな間違い》と《セビーリヤの理髪師》のパリ初演が含まれる。ロッシーニ作品はイタリア王立劇場時代に《アルジェのイタリア女》が上演されていたが、本格的導入はこの1819年が最初で、ほどなくパリの劇場レパートリーは彼の作品一色に染められる。

常に最高の歌手を求めるイタリア劇場の経営陣は、開場後も容赦なく歌手の入れ替えを行い、1821年に23歳の Pasta をプリマ・ドンナに加え、才能豊かなロール・サンティをプリマに昇格させた。卓越した歌手と有能な新人が次々に引き抜かれた結果、イタリア劇場に対抗できる劇場は、コルブラン、ロズムンダ・ピザローニ(6)、アンドレア・ノッツァーリ、ジョヴァンニ・ダヴィドを擁するナポリのサン・カルロ劇場だけとなった。だが、1822年にはロッシーニが主要メンバーを率いてナポリを離れる。フランス政府の要請でロッシーニがイタリア劇場の音楽と舞台を統括する監督に就任したのは1824年、パリは彼のオペラとその歌手たちで征服された。

1819年から1830年の七月革命による中断までの11年間は、イタリア劇場とロッシーニの輝かしい勝利の時代となった。この11年間に同劇場では約1550回のイタリア・オペラ上演が行われ、ロッシーニの18作品が合計988回と、6割を越える驚異的数字を記録している。

◎イタリア劇場におけるロッシーニのオペラ初演データと1831年5月1日までの上演回数

註：18作。うち★世界初演1。

《アルジェのイタリア女》1817年2月1日 (82回) 出演：ローザ・モランディ、ジュディッタ・パスタ (ズルマ役)、マヌエル・ガ
ルシア、ルイーダ・バリッリ、カルロ・ポルト

《幸せな間違い》1819年5月13日 (13回)

《セビーリヤの理髪師》1819年10月26日 (186回。註：パイジェットの《セビーリヤの理髪師》は13回のみ)

《イタリアのトルコ人》1820年5月23日 (41回)

《トルヴァルドとドルリスカ》1820年11月21日 (11回)

《試金石》1821年4月5日 (3回)

《オテッロ》1821年6月5日 (133回)

《泥棒かささぎ》1821年9月18日 (155回)

《イングランド女王エリザベッタ》1822年3月10日 (6回)

《タンクレーディ》1822年4月23日 (105回)

《ラ・チェネレントラ》1822年6月8日 (120回)

《エジプトのモゼ》1822年10月20日 (33回)

註：この初日のみオペラ座 (王立音楽アカデミー劇場) で上演された。これはエルチアを歌うジュディッタ・パスタの慈善公演という特
例で、二日目からは王立イタリア劇場 (サル・ルーヴォア) で上演。

—1823年11月、ロッシーニ最初のパリ滞在、続いて1824年からほぼ定住。

《リッチャルドとゾライデ》1824年5月25日 (21回)

《湖の女》1824年9月7日 (77回)

《ランスへの旅》1825年6月19日★ (4回)

《セミラーミデ》1825年12月8日 (82回)

《ゼルミーラ》1826年3月14日 (19回)

《マティルデ・ディ・シャブラン》1829年10月15日 (11回)

メモ：

イタリア劇場におけるロッシーニ作品上演は、大雑把にロッシーニがパリに来る前と後に分けることが出来る。ロッシーニのパリ滞在以前の上演はしばしば第三者による部分的カットもしくは短縮、楽曲の差し替えが行われ、《イタリアのトルコ人》では16のナンバーのうち半数は大幅に変更され、《アルジェのイタリア女》《ラ・チェネレントラ》《トルヴァルドとドルリスカ》《バビロニアのチーロ》の楽曲との差し替えのほか、不詳の作曲家によるアリアの追加、フィオラヴ

アンティ作曲のアリアの差し替えがある（詳しくはフランス初版のカルリ版と全集版《イタリアのトルコ人》の校註書を参照されたい）。但しこれは極端な例であり、他の作品は当時の常識的な歌手のための改変や差し替えの範囲内である。ロッシーニが関与したパリ上演での変更は全集版で言及されている。

唯一の新作はシャルル 10 世戴冠祝いの《ランスへの旅》で、機会作品として 4 回しか上演されなかった。そこにはパリで知られていない《マオメット 2 世》からの転用や旋律の借用がある。

◎イタリア劇場における 1801 年 5 月 31 日～31 年 5 月 1 日、30 年間の上演ベスト 20（同じ回数の場合もカウント）

- 1) 264 回 チマローザ《秘密の結婚》
- 2) 202 回 モーツァルト《フィガロの結婚》
- 3) 186 回 ロッシーニ《セビーリヤの理髪師》
- 4) 155 回 ロッシーニ《泥棒かささぎ》
- 5) 133 回 ロッシーニ《オテッロ》
- 6) 120 回 ロッシーニ《ラ・チェネレントラ》
- 7) 118 回 フィオラヴァンティ《田舎の女歌手たち》
- 8) 115 回 パイジェッロ《水車小屋の娘》
- 9) 109 回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》
- 10) 105 回 ツィンガレリ《ロメオとジュリエッタ [ジュリエッタとロメオ]》
- =) 105 回 ロッシーニ《タンクレーディ》
- 12) 92 回 パエール《グリゼルダ》
- 13) 82 回 ロッシーニ《アルジェのイタリア女》
- 14) 82 回 ロッシーニ《セミラーミデ》
- 15) 77 回 ロッシーニ《湖の女》
- 16) 65 回 パイジェッロ《ニーナ》
- =) 65 回 グリエルミ《二組の双子》
- 18) 60 回 チマローザ《寛大な敵》
- 19) 58 回 マイール《音楽狂》
- 20) 55 回 チマローザ《オラーツィとクリアーツィ》

メモ：

ロッシーニ作品の最初は 1817 年 2 月 1 日なので 15 年に満たない。それゆえ単純な比較はできないが、第 1 位《秘密の結婚》は 1801 年から 1831 年までまんべんなく上演されており、根強い人気があったことが判る。これに対し第 2 位の《フィガロの結婚》は基本的に 1807～24 年の上演（例外的に 1830 年に 6 回上演）で、ロッシーニがパリに定住して上演されなくなった。同様に、第 7 位の《田舎の女歌手たち》は 1822 年まで、第 8 位の《水車小屋の娘》は 1821 年までの上演である。

興味深いことに、第 9 位の《ドン・ジョヴァンニ》は 1811 年から 1831 年まで継続的に上演されたがうち 55 回は 1823 年以降の上演である。第 10 位の《ロメオとジュリエッタ [ジュリエッタとロメオ]》も同じパターンで、1812 年から 1831 年までのうち半数以上の 67 回は 1822 年以降の上演であり、ロッシーニと並んで評価され続けたことが判る。

一方、ロッシーニの登場と共に消えた作品もある。第 12 位《グリゼルダ》は 1817 年、第 16 位《二組の双子》は 1815 年、第 18 位《寛大な敵》と第 19 位《音楽狂》は 1818 年が最後の上演となっている。ロッシーニが登場する前と後の演目と回数の比較による変化の分析は、当該 30 年を二期に区分して行う必要がある（ここでは省略）。なお、ロッシーニよりも後の世代の作品で 1831 年 5 月 1 日までに上演されたのはメルカダントの《エリーザとクラウディオ》で（1823～28 年に 25 回）、ロッシーニより 1 歳年上のマイアベーアも《エジプトの十字軍》が 1825～28 年に 12 回上演されている。ドニゼッティ作品は 1831 年 9 月 1 日の《アンナ・ボレーナ》が最初で、その後はベッリーニとドニゼッティがロッシーニと共に重要な演目となっていく。

◎オペラ座における初演（Opéra）[王立音楽アカデミー劇場（Théâtre de l'Académie Royale de Musique）]

《コリントスの包圍（*Le siège de Corinthe*）》劇区分：（3 幕のトラジェディ・リリク *tragédie lyrique en trios actes*）

初演：1826 年 10 月 9 日 パリ、オペラ座 註：《マオメット 2 世》のフランス語改作に当たる作品。

《モイーズ（*Moïse*）》 [モイーズとファラオン、または紅海横断 *Moïse et Pharaon, ou Le passage de la Mer Rouge*]（4 幕のオペラ *opéra en quatre actes*）

初演：1827 年 3 月 26 日 パリ、オペラ座 註：《エジプトのモゼ》のフランス語改作に当たる作品。

《オリイ伯爵（*Le comte Ory*）》（2 幕のオペラ *opéra en deux actes*）

初演：1828 年 8 月 20 日 パリ、オペラ座

《ギヨーム・テル（*Guillaume Tell*）》（4 幕のオペラ *opéra en quatre actes*）

◎パリのオデオン座におけるパリ初演（Théâtre de l'Odéon またはオデオン王立劇場 *Théâtre Royale de l'Odéon*）

王立劇場コメディ・フランセーズのために作られ、1782 年に開場したフランス座（*Théâtre Français*）。オデオン座の名称

は1796年より。革命期とナポレオン時代の改称、焼失や再開場を経て、1819年にコメディ・フランセーズの第2劇場として再建され、名称、経営母体、所有の変遷を経て現在に至る。

1820年代の主なレパートリーは、ダレラック、グレトリ、モーツァルト、ヴェーバー、ロッシーニ、マイアベーアの作品。ダレラックとグレトリは古い時代のオペラ=コミックのレパートリーで、他の4人の作品はフランス語に翻案改作して新たな演目とされた。

ロッシーニ作品は基本的にカスティル=ブラーズ（本日の講演第2部で説明）もしくは他の人物による台本・構成・改作で、楽曲の移調、カット、旋律の変更、差し替えが行われている（役名も変更。改作台本に従って楽曲の順序の変更もある）。レチタティーヴォは基本的に台詞への置き換えだが、レシタティフ（伴奏付きレチタティーヴォ）を用いる場合もあり、その点で純粋なオペラ=コミックというよりも自由なフランス語ヴァージョンへの改作と言える。台本意外に総譜もしくはピアノ伴奏譜が出版され、全貌を知ることが出来る。

オデオン座におけるパリ初演は次のとおり（基本的に第三者によるパステイッチョやフランス語改作）。

[[《セビーリヤの理髪師 (*Le Barbier de Séville*)》1824年5月6日。初演は1821年9月19日リヨン（下記）]

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語]

[[パステイッチョ《恋の錯乱 (*Les folies amoureuses*)》(オペラ・ブフォン、3幕) 1824年6月5日。初演は1823年3月1日リヨン（下記）]

[[《泥棒かささぎ (*La pie voleuse*)》(オペラ、3幕) 1824年8月2日。初演は1822年10月15日リール（下記）]

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語]

[[《オテロ (*Othello*)》1825年7月25日。初演は1823年12月1日リヨン（下記）]

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語]

《湖の女 (*La dame du lac*)》(オペラ・エロイク、4幕) 1825年10月31日

註：台本と改作：ル・ミエール・ド・コルヴェ [仏語]

パステイッチョ《セナルの森 (*La forêt de Sénart*)》(オペラ・コミック、3幕) 1826年1月14日

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語] 原作：C・コレ

パステイッチョ《閣下の甥 (*Le neveu de Monseigneur*)》(オペラ・ブフ、2幕) 1826年8月7日、オデオン座（パリ）

註：台本と改作：J=F=A・バヤール/ロミュー/T=M・F・ソヴァージュ [仏語] 原作：L・ゲネ

パステイッチョ《イヴァノエ (*Ivanhoé*)》(オペラ、3幕) 1826年9月15日

註：台本：E・デシャン/G=ギュスターヴ・ド・ヴァイイ [仏語]。原作はウォルター・スコットの小説『アイヴァンホー』(1819)。

アントーニオ・パチーニ (Antonio Pacini, 1778-1866) がロッシーニのオペラの楽曲を用いて再構成した作品で、成立にロッシーニの関与があることから他の作品との位置づけが異なる。

パステイッチョ《遺言書 (*Le Testament*)》(オペラ、2幕) 1827年1月22日、オデオン座（パリ）

註：台本と改作：J=H・ド・ソール/L・ド・サン=ジェニエ [仏語] 構成：J=F=A・ルミエール・ド・コルヴェ

パステイッチョ《プルソーニャック氏 (*Monsieur de Pourceaugnac*)》(オペラ・ブフォン、3幕) 1827年2月24日

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ (仏語) 原作：モリエールの同題の劇

◎その他の劇場におけるパリ初演（基本的に第三者によるパステイッチョやフランス語改作）

パステイッチョ《贗のアニェス (*La fausse Agnès*)》(オペラ・コミック、3幕) 1824年7月6日パリ、ジムナーズ・ドラマティック劇場 註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語] 原作：P・ネリコ=デトゥーシュの1幕劇

◎パリ以外の都市での初演

以下は、本来パリでの初演を想定して制作されたが、何らかの事情で叶わず、他の都市で喜歌劇の一座により初演されたケースもある。但し、パリとの関連があつたこと。

《セビーリヤの理髪師 (*Le Barbier de Séville*)》1821年9月19日リヨン、大劇場

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語]。パリ初演はオデオン座、1824年5月6日

《泥棒かささぎ (*La pie voleuse*)》(オペラ、3幕) 1822年10月15日リール、

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語]。パリ初演はオデオン座、1824年8月2日

パステイッチョ《恋の錯乱 (*Les folies amoureuses*)》(オペラ・ブフォン、3幕) 1823年3月1日リヨン、大劇場

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語] 原作：J・F・ルナル。ロッシーニ、バエール、モーツァルト、チマローザ、パヴェー
ージ他の楽曲で構成。ロッシーニの曲が最も多く使われ、《タンクレーディ》《マオメット 2世》《イングランド女王エリザベッタ》

《ラ・チェネレントラ》《泥棒かささぎ》から借用。パリ初演はオデオン座、1824年6月5日

《オテロ (*Otello*)》1823年12月1日リヨン、大劇場

註：台本と改作：カスティル=ブラーズ [仏語] パリ初演はオデオン座、1825年7月25日

パリ最初のロッシーニの新作となる《ランスへの旅》における旧作の転用と各国の音楽素材

◎旧作からの転用例：《マオメット 2世》から《ランスへの旅》へ

◎各国の音楽素材のパロディと、ロシア音楽借用の新発見

★《ランスへの旅》(1825)フィナーレより 1992年10月ベルリオン上演 コリナ:シルヴィア・マクネアー(S) 放送映像 7:08

第二部 カスティル=ブラーズによるフランス語版《セビーリヤの理髪師》とその映画版の鑑賞

◎カスティル=ブラーズについて

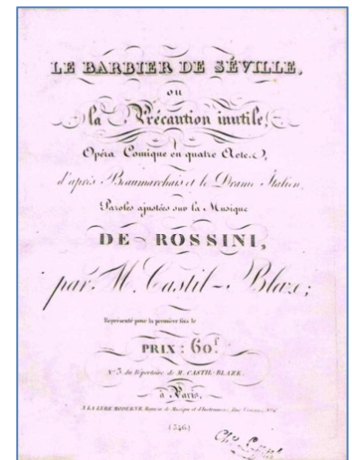
カスティル=ブラーズ (Castil-Blaze [本名フランソワ=アンリ=ジョゼフ・ブラーズ François-Henri-Joseph Blaze], 1784-1857) はフランスの批評家・台本作者・翻案編曲家。ロッシーニ《セビーリヤの理髪師》の他にも名作のフランス語版を独自に作成し、ヴェーバーの音楽を最初にパリへ紹介した人物としても知られるが、《魔弾の射手》を翻案・改作した《森のロバン (*Robin des bois*)》(1824年12月7日初演)は、ベルリオーズによれば「原作の美しさは微塵もなく、編曲者によってずたずたに切断され、通俗化され、歪曲され、ひどい侮辱を加えた」ものであった。それでも観客の人気は高く、カスティル=ブラーズはこの上演で10万フラン以上の収益を得たという(ベルリオーズ『回想録』第16章)。

ベルリオーズが『回想録』の中で「人殺し」「狂人」と断罪したおかげで、カスティル=ブラーズの名は皮肉にも「芸術の敵」「名作の犯罪的改竄者」の代名詞としてオペラ史に残ることになり、晩年彼は自分の改作行為を後悔したといわれる。

1821年に作成した《セビーリヤの理髪師》フランス語版以外にも、ロッシーニ作品の改作やパステイッチョを手がけている(前記参照)。

◎フランス語版《セビーリヤの理髪師》の成立と楽譜出版、初演

オペラ=コミック座での初演を前提に1821年に作成され、総譜の初版は同年パリの「現代堅琴社 (La Lyre Moderne) から出版した。けれどもパリ初演はなんらかの事情で見送られ、同年秋にリヨンのグラン・テアトルにてフランス人の歌手団によって初演された(1821年9月19日)。これに伴い、初演データや歌手名を追加した総譜(2刷に当たる)が同じ出版社から刊行されている。



◎初版総譜のタイトル頁記載(初刷)

LE BARBIER DE SÉVILLE, / ou / La Précaution inutile / Opéra Comique en quatre Actes, / d'après Beaumarchais et le Drame Italien, / Paroles ajustées sur la Musique / De ROSSINI, / par M.Castil-Blaze; / Représenté pour la première fois le / PRIX: 60f. / N. 3 du Répertoire de M. CASTIL-BLAZE. à Paris, / A LA LYRE MODERNE, Magasin de Musique et d'Instrumens, Rue Vivienne N.o 6 / (346)

◎流布

パリ初演は1824年5月6日オデオン座で行われ、その後は諸劇場で上演された。オペラ=コミック座では1884年から恒常的レパートリーとなり、1933年にはオペラ座でも上演。20世紀のある段階で音楽の一部がオリジナル・イタリア語版を参考に改変されており、近代的な形は1974年のフランス語版による全曲録音で知ることが出来る。

◎改変例

アリアの移調と改作(歌手に合わせての移調)

第3幕冒頭の器楽曲(小フィナーレから)

第3幕レッスンの場のアリア差し替え(タンクレーディのカヴァティーナ)

- ・ロジーナとフィガロの二重唱の旋律変更
- ・ロジーナの歌唱部分をカットされた小フィナーレ(短縮)と20世紀におけるさらなる短縮

★1974年のフランス語版全曲録音(EMI) / Berton, Dens and Giraudeau (LP3枚組 PATHE DTX 185-187)

オペラ=コミック《セビーリヤの理髪師》映画版の鑑賞

ジャン・ルビニャック (Jean Loubignac) 監督、1947年制作、48年封切り。全2幕96分
アンドレ・クリュイタンス (André Cluytens) 指揮オペラ=コミック座管弦楽団&合唱団

主なキャスト:

Raymond Amade (comte d'Almaviva), Roger Bussonnet (Figaro), Lucienne Jourfier (Rosine), Renée Gilly (Marceline), Roger Bourdin (Bazile), Louis Musy (Bartholo)
Figaro: Roger Bussonnet

メモ: 台詞と音楽は縮約とカットあり。音は別録音。市販のDVDは無し。



【第1幕】

スペインのセビーリャ。夜明け前。中央に医者バルトロの家がある小さな広場。フィオレッロと楽師たち、続いてアルマヴィーヴァ伯爵が現れ、楽師たちの伴奏で伯爵がバルコニーに向かって歌いかける。だが何の反応もなく、報酬をもらった楽師たちは騒々しく伯爵に礼を述べて立ち去る (N.1 導入曲)。遠くにフィガロの声を聞いた伯爵が身を隠すとフィガロが来て、町の何でも屋で人気者のおれは幸せだ、と歌う (N.2 フィガロのカヴァティーナ)。旧知のフィガロに声をかけた伯爵は、ブラドで見初めた娘を追ってここに来たと話す。バルコニーに姿をみせたロジーナはバルトロに手紙を見とがめられ、「無駄な用心」の歌詞とごまかして落とし、伯爵が拾って隠れる。バルトロが家を出ていくのを見届けた伯爵はフィガロに促され、名前をリンドーロと偽ってロジーナへの愛を歌う (N.3 伯爵のカンツォーネ)。伯爵から彼女の家に入る方法を尋ねられたフィガロは金貨の報酬を約束され、兵士に変装して宿泊証を持参するよう勧める (N.4 伯爵とフィガロの二重唱)。

バルトロの家では、先の歌声に心をときめかせるロジーナが、リンドーロのものになるわ、と決意する (N.5 ロジーナのカヴァティーナ)。バルトロからロジーナと明日までに結婚したいと打ち明けられた音楽教師バジーリオはアルマヴィーヴァ伯爵の到着を教え、中傷を振り撒いて彼を町から追い出そうと提案する (N.6 バジーリオのアリア)。2人のやりとりを聞いたフィガロはその企てをロジーナに教え、手紙を書くよう促すと、彼女がすでに用意しているので呆れかえる (N.7 ロジーナとフィガロの二重唱)。フィガロと入れ替わりに現れたバルトロが、内緒で手紙を書いたと非難する (N.8 バルトロのアリア)。ほどなく酔っぱらいの兵士に扮した伯爵が現れ、バルトロを愚弄すると、ロジーナは彼がリンドーロと気づく。そこに騒ぎを聞きつけて士官と兵士たちが来て、暴れた兵士を逮捕しようとするが、伯爵から素性をそっと知らされた士官が敬礼し、それを見たバルトロが呆気にとられ、一同大混乱に陥る (N.9 第1幕フィナーレ)。

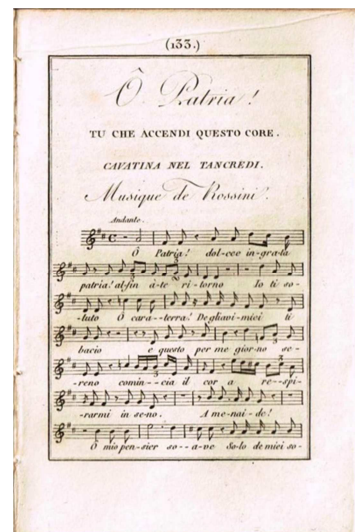
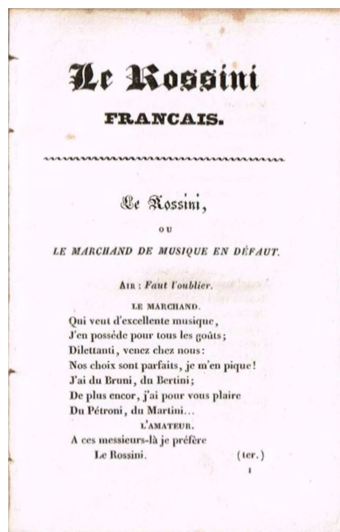
【第2幕】

バルトロ家の一室。先の出来事をふりかえるバルトロのもとにバジーリオの弟子ドン・アロンソと偽る伯爵が現れる (レチタティーヴォ、N.10 伯爵とバルトロの二重唱)。師の代わりにレッスンすると言われたバルトロはロジーナの手紙を受け取って信用し、ロジーナを連れてくる。彼女はアロンソがリンドーロの仮装と気づき、2人は歌のレッスンにかこつけて互いの愛を確かめる (N.11 ロジーナのアリア)。バルトロが昔の歌を歌いながら踊ると (N.12 バルトロのアリエッタ)、フィガロが来て髭を剃ろうとする。フィガロはバルトロの気をそらして鑑戸の鍵を手に入れ、ロジーナとリンドーロ [伯爵] が愛を誓い合うと、不意にバジーリオが現れる。フィガロと伯爵は彼を病人に仕立て、こっそり財布を渡されたバジーリオはわけが判らず退散する。フィガロに髭を剃られるバルトロは、ロジーナと伯爵の会話からアロンソの変装を知って怒り、彼らを部屋から追い出す (N.13 五重唱)。

家政婦ベルタが恋の病を嘆く (N.14 ベルタのアリア)。バジーリオの話でアロンソを伯爵と確信したバルトロは、すぐにロジーナと結婚しようと公証人を呼びに行かせる。そしてアロンソから受け取った手紙をロジーナに渡し、リンドーロはおまを伯爵に売り渡すつもりだと教える。これを信じたロジーナは、真夜中にリンドーロと駆け落ちする約束があると教え、嘆き悲しむ。

一陣の嵐が通り過ぎ (N.15 嵐)、はしごを使ってフィガロと伯爵が部屋に現れる。ロジーナに非難された伯爵は真実の愛に感動して正体を明かし、フィガロは早く逃げまじょうと急かすが (N.16 三重唱)、はしごが外されていて慌てふためく。だが、公証人を見つけるとバジーリオを立ち合い人に、伯爵とロジーナを結婚させてしまう。伯爵はなおも抗議しようとするバルトロを一喝し、ロジーナに優しく呼びかける (N.17 レチタティーヴォ・ストゥルメンタートと伯爵のアリア)。伯爵にロジーナの持参金は不要と言われたバルトロは彼女を諦め、2人の結婚を認める (N.18 第2幕小フィナーレ)。

HP版の付記：次の『ロッシーニ・フランセ』はテキストに含めず、例会当日に画像を映して説明しました。



1823年パリで出版された『ロッシーニ・フランセ (Rossini Français)』のタイトル頁、冒頭頁、タンクレーディのカヴァティーナ(筆者所蔵)